

広島大学

令和7年度一般選抜(前期日程)・
総合型選抜外国人留学生型2月実施

解答例又は出題の意図等

科目名：国語

現代の国語・言語文化(近代以降の文章)・
論理国語・文学国語(近代以降の文章)

解答の公表に当たって、一義的な解答が示せない記述式の問題等については、「出題の意図又は複数の若しくは標準的な解答例等」を公表することとしています。

また、記述式の問題以外の問題についても、標準的な解答例として正答の一つを示している場合があります。

第一問 解答例

問一 a 酸 b 緻密 c 完璧 d 凝 e 妬

問二 はっきりとした結末が用意されていて、書き手がそこに向かって書くような種類の小説の書き方も確かにあるという考え方。

問三 人生になんらかの意義があり、目的があつて、その目的に殉じるようにして生きなければならぬと思つていたぼくにとつて、人生がたった一度である限り、練習することも、理解することもかなわないというクンデラの言葉は、それまでのぼくの人生観・小説観を真つ向から否定するものであつたにもかかわらず、小説を書くことについての新たな見方をもたらすものであり、胸を打たれた。

問四 うまく消化できないなにかをうまく言語化して話す回路のようなものを、どうしても見つけることができないから。

問五 なんてことない光景や忘れられない仕草や他愛もない空気に読者が感じ入ることができて、それを忘れないでいてくれるような文章を書こうとしていた。

問六 経験を言語化し、物語化することで、日々揺れ動く人間の気持ちの一つ一つの側面を重ねたり、離したり、いがみ合わせたりすることになるということ。

問七 顔や声には、物語が付随しているわけではないが、小説のシーンは、毎日のなんでもないことを物語として想起させるから。

問八 筆者は自分の人生に揺るぎない価値を認めそれにふさわしい言葉を与えることが小説を書くことだと考えていたが、ミン・クンデラの言葉に出会いその考えを根底から崩された。その言葉によって、先生の言葉の「真意」は人生の細部を物語によって理解し記憶していくことであり、それが小説を書く上での核心であると気づいた。(150字)

【第二問（小説） 解答例】

問一 一塁への走塁自体はソフトボールで慣れきっている行為であるにもかかわらず、距離が延びたために、あたかもこれまで経験したことのない特別な価値のあることを始めているようになった気分。

問二 エ

問三 これまでソフトボールでは十分に捕球できる状態だったのに、簡単な球を取り損ねてしまつて、とまどう気持ち。

問四 ソフトボールから野球に転身した経験を共有していること。

問五

1 通過儀礼

2 球の大きさも重さも野球とは異なるソフトボールに習熟していた「私」の身体は野球選手としてはいびつなものであり、彫像の不要な部分を槌と鑿で削って整形するように、野球のバットで打たれた球を捕球させつづけることで、ソフトボール選手としての「私」の身体を削り、野球選手としての身体に変えようとする事。

問六 ソフトボールと違って小さく軽い野球の球を当初は捕球できずにとまどっていたが、侑希美さんの打球を受け続け、捕球するための確かな手応えを得ることによって、野球選手としての実感と余裕が出てきた。（百字）

第三問 解答例

問一 食器や食品が母にしか分からないような秩序で置かれている状態。

問二 フェミニズムを勉強して男女平等の考えを私は持っているが、祖母の家では男尊女卑の考え方にもとづく行動を強いられる点。

問三 思ったことを言葉にして伝え、相手の言葉を受け止めて回答を返すようなコミュニケーション。

問四 同じ場所に、真剣に疑問を解決しようとする家族と、それに無関心であるかのように遊んでいる家族が共存している状況。
(55字)

問五 家族は日常生活を送るために互いに関係を持って行動しなければならないが、互いの違いを掘り下げて理解を深めるようなコミュニケーションは行っていないから。

問六 家族が同じ屋根の下で眠り、食事をし、健康に過ごすことができれば、「著作権保護の観点から、公衆表示していません」などという高尚な欲求は後回しでもよいという論理。